

子供を本好きにするには

—まず大人、特に親や先生が本を読もう—

開倫塾

塾長 林 明夫

Q：子供を本好きにするにはどうしたらよいでしょう。

A：(林 明夫。以下略)まずは、次の文章をご熟読ください。

『子供を本好きにするにはどうすればよいでしょう、としばしば聞かれるのだが、答えは簡単である。親が本を読めばいいのだ。現に、本好きな人のほとんどは、子供の頃から本好きの親と本に囲まれて育った人である。親が英語を話していれば子供も英語を話すようになるし、親がスポーツ好きだったら、子供もスポーツに触れる機会は増えるだろう。なのに「子供を本好きにするにはどうすればよいのか」という質問をしてくること自体が不思議でたまらない。

私の経験からすると、同じ家の中で大人が本を読んでいると、興味を示さない子供はいない。大人の我々だって電車の中で向かいの人が何を読んでいるか気になるものだ。まして子供は「何を読んでいるの?」「それ面白いの?」と必ず聞いてくる。』

これは、2006 年 2 月 26 日(日曜日)付けの日本経済新聞文化欄の恩田陸(おんたりく)先生の文章より引用させて頂いたものです。

Q：子供に本を読ませたいのであれば、まずは親が読めばよいということですね。

A：その通りです。恩田先生のおっしゃる通りだと私も考えます。これに加えて、親だけではなく、大人は皆本を読むとよいと思います。

日本ほど手軽に質のよい本が手に入る国は世界中でも数少ないと私は考えます。書店はもちろんのこと、コンビニでも本は手に入ります。最近では、古本屋も大部進化してブックオフのような大型店も至る所にできてきましたし、インターネットでも簡単に本を手に入れられるようになりました。図書館も最近は随分親切になり、使い勝手がよくなりました。

Q：そうですね。大型店も随分できてきましたね。

A：「幸せとは何か」と言えば、「選択肢が少しでも多くあること」であると私は考えます。様々なジャンルの中から自分のお気に入りの本を自由に選ぶことができ、それを自由に読むことができるのは、大きな「幸せ」であると思います。

自由に本を選択し自由に読む、このような「自由」を大人は大いに享受(きょうじゅ)、enjoy(エンジョイ)し、その喜びを子供に見せてあげて頂きたいと思います。

Q：先生も本を読んだ方がよいですね。

A：その通りだと思います。学習塾の先生も含め先生と呼ばれる人は、日本国中に何百万人も、もしかしたら何千万人もいらっしゃると思います。その先生と呼ばれる人は、お金を貰っている貰っていないに関わらず、人を教え導くことが社会的使命(mission, ミッション)ですから、教わる人に比べて少なくとも数十倍以上、もしかしたら数百倍、数千倍以上も教える内容や教え方について勉強を重ねてから、教わる人の前に立たねばなりません。

そのためには、先生として必要な本を熟読し、正確に身に付け、その分野の最新の本を大量に速読し知識をアップトゥデート(Up To Date)、つまり今日的なものにしておく必要があります。

Q：大人が読んで面白い本は何かありますか。

A：あります。たくさんあります。あってあって困るほどです。

Q：とりあえず、1つだけ紹介していただけますか。

A：大人が読んで面白い本を1つだけとなれば……。やはり「南方熊楠(みなみかたくまぐす)」先生の本が一番面白いでしょうね。

読む順序としては、次の通りがよいでしょう。

(1) 水木しげる著「猫楠(NEKO-GUSU)」－南方熊楠の生涯－ 角川文庫ソフィア 660 円

＊まずは、水木しげる氏のマンガを2～3回気楽に読み、「熊楠」の生涯を知る。

(2) 鶴見和子著「南方熊楠」－地球志向の比較学－講談社学術文庫 1100 円

＊水木しげる氏の本を読んだ後なら、鶴見女史のこの本も簡単に読めますので、気になるところ読みたいところだけを読む。

(3) 南方熊楠著「十二支考(上)(下)」岩波文庫 800 円

＊大人の読書として、私も随分いろいろな本を読みましたが、これほど面白い本はないと大いに推薦いたします。

私の提案した順序通り(1)と(2)の本を読んでから、「十二支考(上)(下)」をできるだけゆっくり読むと、人生の面白さ、地球の奥深さがジワー、と実感できると確信します。「ALWAYS, 三丁目の夕日」は、この熊楠を読んでから見たり読んだりすると、より奥深さがわかると私は思います。

同じページをゆっくりと2～3回ずつ読み、熊楠の説明が自分なりに理解できると、1つ1つの項目を誰かに教えてあげたくなってしまう、それほど面白い本です。

かの民俗学者柳田国男も舌を巻いたほどの人物の本ですので、是非読んでみてください。人生が明るくなります。また、地球環境に最もやさしい人の本です。これからの日本や世界の環境を考える上で示唆に富み、自然科学系に進む人の必読書と言えます。

－ 2006 年 3 月 6 日記－